

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：32617

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13236

研究課題名（和文）西周王朝の封建と疆域：甲骨と青銅器による祭祀と政治支配

研究課題名（英文）Feudalism and the Frontier in the Western Zhou Dynasty: Ritual and Political Rule through Oracle Bones and Bronze Vessels

研究代表者

角道 亮介（Kakudo, Ryosuke）

駒澤大学・文学部・准教授

研究者番号：00735227

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中国・西周時代の地方支配について、中央による政治的コントロールがどのような物品を通じて実効性を持ったのかを考古学的に検討した研究である。西周王朝は政治的な役割をこめて祭祀用の青銅器を作成・配布していたが、甘肅省姚河ゲン遺跡で発見された西周初期の有字甲骨の存在は、王朝による甲骨祭祀を通じた政治支配の可能性を提起していた。しかし本研究を通じて、西周時代の非中央地域において姚河ゲン遺跡以外に有事甲骨を出土する遺跡は基本的に存在せず、甲骨祭祀は当遺跡でのみ限定的に行われた行為であったことが分かった。西周王朝の政治的支配を物語る物質文化は、祭祀用の青銅器だけであったと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

西周時代は、東アジア世界における国家形成期の社会である。人々が自らの社会を変革してゆく中で、なぜ国家を形成したのは必然だったのか、偶然だったのかを検討することは、人類の特性とその歴史を理解するうえで非常に重要な視点をもたらすものと思われる。

本研究を通じて、西周時代の国家形成において、祭祀行為そのものの共有よりも、希少性を有する物品の共有こそが社会の拡大により重要であったことが分かった。西周王朝の成立は、青銅器という希少品を利用したことその特徴があり、だからこそそれ以前の社会とは異なる複雑化した社会を達成できたとも考えられる。社会の拡大を望む主体の存在が、権力という概念につながったと想定される。

研究成果の概要（英文）：This study is an archaeological investigation of local rule during the Western Zhou dynasty in China. It examines the effectiveness of political control by the center through the examination of objects. The Western Zhou dynasty created and distributed ritual bronzes with a political role in mind. The existence of an oracle bone script in the early Western Zhou period discovered at the Yaohegeng site in Gansu Province raises the possibility of political control by the dynasty through oracle bones.

However, the study revealed that, with the exception of the Yaohegeng site, no other non-central Western Zhou period sites yielded evidence of oracle bones. It can be posited that the oracle bone ritual was observed to be a limited practice conducted exclusively at this site. It is postulated that the only material culture that attests to the political dominance of the Western Zhou Dynasty was the bronze vessels used for rituals.

研究分野：考古学

キーワード：中国考古学 青銅器 甲骨文 西周時代 祭祀 姚河ゲン遺跡

1. 研究開始当初の背景

『史記』などの文献によれば、周は殷王朝を打ち破り成立した王朝であり、支配地域の各地に親族や有力な配下を派遣し当地を支配させ王朝の藩屏としたという。これが文献史的意味での封建諸侯であり、古来より多くの研究者が文献上に現れる封建諸国の立地を実際の地域に比定する歴史地理学的な試みがなされてきた。20世紀に入り考古学的成果が利用されるようになると、西周期の青銅器銘文に鑄込まれた集団名・国名を文献にみえる諸侯国名に比定することで、青銅器出土地点を特定の諸侯国と関連づけることが可能となった。むしろ20世紀以降の周代考古学研究は、文献史への研究から想定される諸侯国の地に狙いを定めて発掘調査を行い、出土した青銅器銘文を解読することで当地が想定される諸侯国の地であることを再確認することが主軸であったとも言える。このような研究方法の最大の問題点は、そもそも文献に記載されなかった地域への研究が行われず、考古学による社会の復元が結果的には文献研究の追認に過ぎないという点にある。現在では文献に記されない有力集団が遺した遺跡への発掘調査も進みつつあるが、彼らの社会的立ち位置への考察は依然として低調である。

文献に登場する西周諸侯は王朝の東方に位置することが多い。王室の親族や有力な臣下が封建されるとされる晋・衛・魯・燕などの所在地はそれぞれ山西省・河南省・山東省・河北省であり、現在の陝西省西安市から岐山県の一帯にあたる周王畿から見ればいずれも東に位置している。筆者はこれまでの研究において、西周王朝と有力諸侯国の青銅製祭器(青銅彝器)を全面的に比較し、遠隔地であっても器種の型式変化・組成の面で両者は基本的に一致すること、ただし同型式・同組成の青銅彝器のセットを受容するかどうかには諸侯国地域ごとの差異が現れることを明らかにしてきた。あわせて青銅彝器製作工房が王朝の中心地のみでしか発見されないことを勘案し、青銅彝器の製作主体である王朝が諸侯国へ積極的に分配していたことを論じた。青銅彝器に鑄込まれた祖先祭祀に関する銘文は王朝権力の再確認と不可分に結びついており、諸侯国側における青銅彝器の受容/非受容は王朝による政治的枠組みへの参入と離脱を意味している(角道亮介 2014『西周王朝とその青銅器』六一書房)。西周時代の王畿と東方諸侯との間には、青銅彝器を媒介とした政治的祭祀システムが存在していた。後代、封建という土地を介した政治的結びつきに

仮託されたのは、このような青銅器祭祀の記憶だったのであろう。

一方で同時代の西方の諸侯国・有力者への理解は非常に限定的である。そもそも文献によれば周の西方には犬戎や西戎と呼ばれる異民族が居住していた地域とされるため、歴史的に研究の動機が薄か

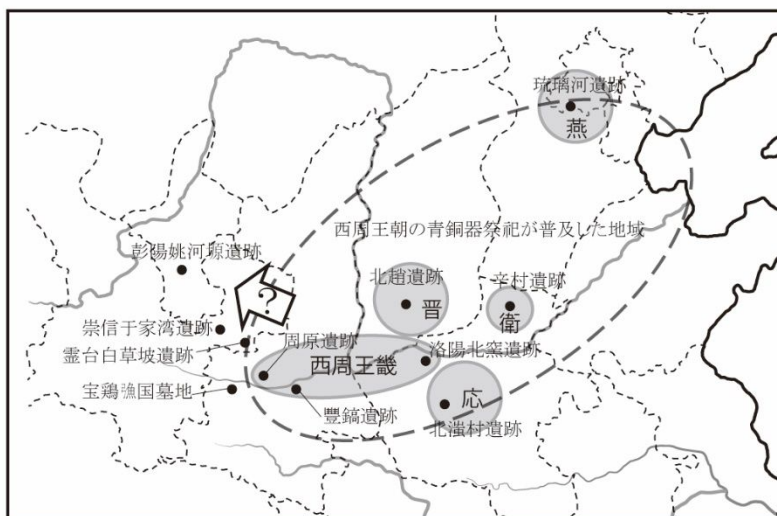


図1 西周王畿と西周青銅器文化圏

ったという背景がある。まとまった考古学的な発掘資料にも乏しく、周王朝が自らの西隣になぜ有力な諸侯を置かなかつたのか(あるいは置いたものの文献記録として残らなかつたのか)という問題は大きな問題として残されたままである。

## 2. 研究の目的

西周王畿の西方疆域の実態については、少数ではあるものの手がかりとなる遺跡が発見されている。1970年代から80年代にかけて陝西省宝鶏市で発掘された弓魚国関連遺跡は、西周時代の諸侯国とは異なる文脈で有力集団が存在していたことを示す格好の発見であった。弓魚国は文献には全く現れず、出土青銅器銘文の解読からその名称が判明した集団である。出土した青銅彝器の規模から諸侯クラスの身分が想定されるが、数多くの在地製青銅彝器が大量に出土したことが重要であった。これらの在地系青銅彝器は大枠としての器種こそ王朝系青銅器と類似するが、その型式や組成は全く異なり、王朝との関係を強調する銘文も鑄込まれていない。西周王畿の近傍に王朝が想定する青銅器祭祀、すなわち礼制から逸脱した集団が存在していたことを証明した点が、弓魚国青銅器の持つ重要な学術的意義であった(西



図2 石鼓山墓地出土の在地系青銅器・土器

江清高 1999「西周時代の関中平原における『弓魚』集団の位置」論集編集委員会編『論集 中国古代の文字と文化』汲古書院、角道亮介 2008「宝鶏弓魚国墓における葬礼の差異とその変化」『東京大学考古学研究室研究紀要』第22号)。また、2012年に同じく宝鶏市で発見された石鼓山墓地3・4号墓からは王朝系青銅器とともに在地系の青銅彝器・土器が出土しており、西周期の王畿西方には、西周王朝成立以前からの在地的伝統を保持した集団があったことが指摘されている(西江清高 2014「宝鶏石鼓山西周墓の発見と高領袋足鬲」飯島武次編『中華文明の考古学』同成社、王占奎・丁岩 2014「石鼓山商周墓地4号墓初識」陝西省考古研究院ほか編『周野鹿鳴』上海書画出版社)。

このように、この30年ほどの間の発掘調査によって、西周王畿の西方にいくつかの有力集団がいたことが徐々に明らかになりつつある。弓魚墓地・石鼓山墓地に加え、甘肅省崇信県于家湾遺跡、そして「2本研究の着想に至った経緯」で詳述する寧夏回族自治区彭陽県姚河塬遺跡などはいずれも近年明らかになった西周王畿の近くに位置する諸侯クラスの墓であるが、出土遺物に王朝系青銅彝器からの逸脱が見られる点、周系の人々とは異なる文化的伝統が確認される点、で共通点を持っているように思われる。応募者はこれらの西周王畿に西隣する諸侯国クラスの集団においては、王畿内部、あるいは東方の諸侯国との関係で重視された青銅彝器による祭祀システムとは異なる政治支配が行われていた可能性が高いと考えており、新たな発掘調査の成果を総合的に検討することで、これまで限定的であった王朝西方の有力集団の実態を解明できる。本研究の目的は、これらの西方諸侯国の墓の構造や出土遺物を比較検討することによって彼らの共通点をより深いレベルで抽出し、西周王朝の西方支配を考古学的に明らかにすることにある。

本研究を遂行する上で特に重要であるのが、上記の の視点である。例えば、弓魚国



墓地では西周王畿においては基本的にみられない夫婦の同穴合葬がみられ、姚河塬墓地では耳室や複数の動物犠牲を伴う特異な墓室が確認されている。中国国内における研究では、ともすれば「異民族が“周化”した」として片づけられるこのような特殊な状況が、どのような政治的過程を経て成立したのか、とくに西周王朝からどのような働きかけがあったのかを検討することが、本研究の目的である。出土遺物における在在地系青銅器・土器の観察と資料化を行うことで、従来茫漠と考えられてきた周王朝の西方の「異民族」の実態を明らかにすることができるであろう。王畿西方にいた諸集団に王朝がいかなる政治的接近を試みたのかを明らかにすることは、中国の初期王朝における疆域の認識を考える際に、重要な手掛かりを供するものであると考える。

### 3. 研究の方法

本研究の遂行のうえで、2018年1月に寧夏回族自治区彭陽県で発見された姚河塬遺跡の発見は重要である。本遺跡の年代は殷代末期から西周中期ごろと考えられ、墓室の規模や出土遺物の豊富さから、西周王朝と関係を持った有力集団の首長墓であると考えられている。これまで寧夏回族自治区では大規模な西周墓は発見されておらず、西周王畿の北西部についてはどのような疆域支配が行われたのかは不明であったが、本遺跡の発見によって解明のための基礎的データが整ったといってもよい。

姚河塬遺跡からは西周王朝系青銅彝器が出土しており、大枠としての西周文化圏に属していたのは間違いがない。しかしながら、大墓(13号墓)の墓室形態が3つの耳室を有する腹室墓である点と、牛や犬などの多数の動物犠牲を伴う点、墓から文字を有する甲骨片が発見された点で、きわめて特殊な性格を有する首長墓であることが明らかとなっている。



図3 姚河塬遺跡13号墓平面写真と出土した有字甲骨(馬強氏提供)

西周の諸侯国地域では甲骨文は基本的に出土せず、王畿からの出土も極めて限定的である。そもそも甲骨文は殷の王室に特徴的な祭祀であり、西周の青銅器祭祀とは一線を画す存在である。それにもかかわらず、西周王畿の近傍でこのような特殊な遺物が出土したということは、その背後に西周王朝の何らかの関与を想定せざるを得ない。墓における副室や多数の動物犠牲の存在は、当墓の被葬者が周系の集団とは異なる出自を持つことを示唆しており、これはこれまでの散発的な王畿西方の有力集団墓に共通する特徴である。東方諸侯国と異なり、西方の諸集団が西周王朝系青銅器から逸脱した器を多く有する原因として、西周王朝が主催した甲骨祭祀の存在が想定される。本研究では、姚河塬遺跡および周辺の西周遺跡において、祭祀青銅器の有無と甲骨文の有無 遺跡に

おける在地的な文化伝統の有無という二つの側面から、王朝主体の甲骨祭祀の存在について検討した。

#### 4. 研究成果

姚河塬遺跡から出土した甲骨文を確認した結果、以下のような点が明らかになった。文字の配置が殷墟甲骨・西周甲骨とは明らかに異なる。個々の文字の書体もまた、殷墟や西周の甲骨とは明らかに異なる、という二点である。について、殷墟甲骨や西周甲骨には、甲骨のどの部位に文字を配するのかについて一定の規則性があった。一方、現状確認されている姚河塬遺跡出土の甲骨文字は、どちらとも異なり、独自の(やや雑多に見える)文字配置をしている。についても、姚河塬遺跡の甲骨文字の字体は殷墟遺跡のいずれの時期の文字とは異なり、西周甲骨の繊細な筆致とも異なる。したがって、姚河塬遺跡の甲骨文字は、西周王朝の書契者の手によるものでも、かつての殷王朝の書契者の手によるものでもなく、姚河塬遺跡の知識人が模倣した結果だと想定することが妥当だと思われる。また、現状では姚河塬遺跡以外に有字甲骨を出土した遺跡は見つかっておらず、おそらくは姚河塬遺跡のみで見られる限定的な状況であったと想定される。

西周王朝西方の疆域における祭祀用青銅器(青銅礼器)の出土遺跡は少なく、その大部分が周王朝の中心地である関中盆地で出土する青銅器と同型式であった。また、姚河塬遺跡では青銅器鑄型が出土しているが、いずれも青銅礼器を鑄造したとは断定できず、むしろ武器や工具を鑄造していた可能性が高い。したがって、「2. 研究の目的」で触れた弓魚墓地のような青銅礼器を姚河塬の人々が独自に生産していたとは考えにくく、王朝西方の諸地点における青銅器の出土はあくまで王朝側からの配布の結果と考えるべきであろう。

姚河塬遺跡を中心とした西周王朝西方地域における甲骨文・青銅礼器への分析の結果、周王朝が青銅器に託した政治的な役割を甲骨文に見出すことはできないという結論に至った。姚河塬遺跡の甲骨文は在地の有力者・知識人が、関中盆地という隣人の地域で行われていた祭祀を模倣することによって自らの権威を高めようとする行為の一種であったと想定される。そしてこのような試みは決して定着することなく、早くに終焉した。その点で姚河塬遺跡の有字甲骨は、新石器時代の玉琮や二里头時代の玉璋と同じく、実質的な政治的支配/被支配関係を物語る器物ではなかったと考えうる。西周王朝の西方においてなぜ青銅礼器の配布が低調であったのかという問題はなお不明であるが、少なくとも地方支配のために王朝が利用した器物は青銅礼器のみであり、西周期の甲骨文は同様の役割を担っていたわけではなかった。姚河塬遺跡の甲骨文字はむしろ、大量の動物祭祀という在地的特徴を濃厚に有する社会が、東隣の西周社会で行われていた祭祀の表面を模倣した例外的な結果と見るべきであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

|   |                     |
|---|---------------------|
| 1. 著者名<br>角道亮介  | 4. 巻<br>-           |
| 2. 論文標題<br>中国における青銅製楽器の出現と展開                              | 5. 発行年<br>2023年     |
| 3. 雑誌名<br>音楽考古学シンポジウム実行委員会編『音楽考古学の可能性 - 楽器研究の新たな地平を探る - 』 | 6. 最初と最後の頁<br>29-38 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                             | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                    | 国際共著<br>-           |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>角道亮介                                      | 4. 巻<br>-             |
| 2. 論文標題<br>西周王朝と「族属」問題 - 腰坑の分析からみた被葬者の性格 -          | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>大貫静夫編『中国考古学論叢 - 古代東アジア社会への多角的アプローチ - 』同成社 | 6. 最初と最後の頁<br>129-160 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                       | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難              | 国際共著<br>-             |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>角道亮介   | 4. 巻<br>季刊考古学・別冊35  |
| 2. 論文標題<br>中国初期王朝時代における「中心」の形成                         | 5. 発行年<br>2021年     |
| 3. 雑誌名<br>北條芳隆・小茄子川歩・有松唯編『社会進化の比較考古学 - 都市・権力・国家 - 』雄山閣 | 6. 最初と最後の頁<br>55-68 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                          | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                 | 国際共著<br>-           |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>角道亮介                               | 4. 巻<br>3             |
| 2. 論文標題<br>西周王朝と東の疆域 - 山東地域出土青銅器銘文への分析を中心に - | 5. 発行年<br>2020年       |
| 3. 雑誌名<br>『生産の考古学』六一書房                       | 6. 最初と最後の頁<br>451-463 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難       | 国際共著<br>-             |

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

|                                      |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>角道亮介                      |
| 2. 発表標題<br>中国国家形成期における都市プランの変遷       |
| 3. 学会等名<br>シンポジウム「東は東、西は西？比較考古学の新視角」 |
| 4. 発表年<br>2022年                      |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>角道亮介                                      |
| 2. 発表標題<br>中国における青銅製楽器の出現と展開                         |
| 3. 学会等名<br>シンポジウム「音楽考古学の可能性 - 楽器研究の新たな地平を探る -」（招待講演） |
| 4. 発表年<br>2022年                                      |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>角道亮介                           |
| 2. 発表標題<br>秦人の都城遺跡                        |
| 3. 学会等名<br>国際シンポジウム「秦の淵源：秦文化研究の最前線」（国際学会） |
| 4. 発表年<br>2021年                           |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>角道亮介                                 |
| 2. 発表標題<br>中国初期王朝時代における「中心」の形成 - 祖先祭祀の共有と物質文化 - |
| 3. 学会等名<br>シンポジウム「社会進化の比較考古学」(KINDAS)           |
| 4. 発表年<br>2020年                                 |

## 〔図書〕 計1件

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>飯島武次・角道亮介・鈴木舞・大日方一郎・湯沢丈・菊地大樹 | 4. 発行年<br>2021年 |
| 2. 出版社<br>外為印刷                         | 5. 総ページ数<br>135 |
| 3. 書名<br>秦の淵源 ―秦文化研究の最前線―              |                 |

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

|   |
|---|
| <p>2023年10月に、北京大学考古文博学院・中国社会科学院考古研究所・陝西省考古研究院と共同で、陝西省扶風県に位置する周原遺跡における考古学的調査を実施した。本年度の調査は周原遺跡西南部における先周時代の宮殿跡と西周時代後期の外城壁の発掘が主な目的であり、北京大学考古文博学院の曹大志教授と協力しながら実地調査を行った。</p> <p>調査の結果、先周時代の集落関連遺構が発見された。かなり不規則な形をしているものの、版築技法で作られた大規模な基礎が検出されており、出土遺物の年代からみても先周時代の尾方建築遺構だと思われる。また、複数個所で西周後期の外城壁と思われる建築基礎が見つかったが、城壁ではなく大型建築遺構が連続的に並んでおり、その基礎部分である可能性もある。城壁の基礎が建築遺構の基礎かを明らかにするために、継続した面的な調査が必要であることを確認した。</p> |
|---|

## 6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)    | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|-------|------------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 曹 大志<br><br>(Cao Dazhi)      | 北京大学考古文博学院            |    |
| 研究協力者 | 宋 江寧<br><br>(Song Jiangning) | 中国社会科学院考古研究所          |    |
| 研究協力者 | 種 建栄<br><br>(Chong Jianrong) | 陝西省考古研究院              |    |

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

## 〔国際研究集会〕 計0件



8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|